新たな出発の年を振り返って

松永　聖子

いずみナーサリーは、平成十七年度四月より、お茶の水女子大学の附属学校園の一つとして、園舎、名称とも改めて再出発をしました。生後六か月から三歳未満児を対象とし、定員八～十名の異年齢混合の一クラスです。

一・新しい園舎で

新しい園舎に引っ越して、一年が経ちました。名称も「いずみ保育所」から「いずみナーサリー」に変更し、電話の応対などで当初感じていた戸惑いも、今ではすっかりなくなりました。

この園舎は、大学と隣接する職員寮の管理人室、集会室を改築したものです。改築の際には、洗面台の高さや、窓の開閉の形式、これまで使っていた家具や什器を使ったレイアウト、子どもの動線を考えた各部屋の使い方など、保育の環境としての建物について改めて考える機会となりました。

たとえば、洗面台の高さについては、附属幼稚園の三歳児の保育室の洗面台、トイレの洗面台の高さを測らせていただき、参考にしました。高さとともに奥行き、蛇口の高さも大切な要素であることに気付きました。

また、集会室の窓は、もともとは一枚のガラスを回転させて隙間をつくることで開閉するものでした。これ

は、指を挟む危険性があり、また、網戸をつけることができないため、上下の引き戸に作り直してもらい、網戸も設置しました。換気のためだけなら、窓は締め切りにし換気扇で対応することもできたのですが、保育の中で外からの風や光、音を直接感じることで気分転換ができ、おおらかな雰囲気に欠かせないものであると考えました。

玄関やトイレ、和室などはほとんど個人のお宅の雰囲気を残したものになりました。一日九時間近くの長い時間をナーサリーで過ごす子どもたちにとって大切な、家庭的な雰囲気が象徴されているようで、私は気に入っています。引越し当初、登園時に出迎えた職員に「○○さんの、おうち?」と不思議そうにしていた、「おじゃまします」と登園してきた、などのエピソードがかわいらしく、忘れられません。

二. みんなで集う食卓のために

零歳児から二歳児まで、そして保育士も集う昼食の時

▲風・光・音を直接感じられるのを願って

間。家庭では、いろいろな年齢の家族が一つのテーブルに集うことは自然なことなのに、保育の場でそれを実現しようとすると、なぜか多少の工夫が必要でした。

幼稚園の一室を改装しての「いずみ保育所」時代には、高めのテーブルと、附属幼稚園から借りた三～五歳児用の椅子、テーブルのついたベビーチェアがあり、これらを組み合わせて昼食をとっていました。

哺乳瓶でのミルクの時期は、保育士のおひざや抱っこです。離乳食が始まると、テーブルつきのベビーチェアに座るのですが、これはテーブルがひじの部分でつながっており、座る部分ともベルトで固定できるので、おすわりがまだ危なっかしい時期からひとりで座ることができます。離乳食の時期は、だいたいこの椅子を使います。ここから、幼児用の椅子へのステップの幅が大きいのですが、ベビーチェアは二つしかないので、この椅子が必要な人が出てきたら、これまで使っていた人は幼児用の椅子に移ってもらっていました。一歳半ころの子どもにとっては、高さもひじがないことも少し注意が必要でしたが、しっかり椅子を引くようにしたり、保育士が隣に座るようにしたりしました。このようにして、一つのテーブルを囲んで、昼食はとてもにぎやかに、そしてなぜかおやつはとても静かでした。「ぽり、ぽり、ぽり……」と、おせんべいをかじる音がよく響いているのがおかしかったです。

引越しを機に、幼稚園の椅子を返し、新たに一、二歳児用の椅子と低いテーブルを購入しました。椅子に関しては、一歳から三歳向けに約二センチメートル刻みに四段階あるので迷ってしまい、メーカーの方に相談しました。その中で、教室用の机・椅子などの学校用家具にはJISという規格があり、乳幼児用のものもこの規格に基づいて設計されていること、足の裏を床につけた状態でのひざの角度で椅子の高さの適正さを見ることなどを知りました。

その上で、二種類の高さの椅子を選び、これで、ベビーチェア以降、それぞれの子どもの成長にあった椅子に座れると思っていたのですが、昼食のセッティングを

してみて、あることに気付きました。

様々な椅子の高さと、テーブルの高さとのバランスです。これまでの三～五歳児用の椅子でちょうど良かったテーブルは、一、二歳児用の椅子には高すぎました。あらたに購入した低いテーブルは、一歳児にはちょうど良いのですが、二歳児はひざがつかえて座ることができませんでした。高さの違うテーブルを集めて食卓にするのも不自然でした。

そこで、さらにメーカーの方々と二か月間ほど意見を交換し合い、二つの試みをしました。まず、高いテーブルの脚を、二種類のうちの低いほうの椅子の高さに合わせて切ることにしました。さらに、高いほうの椅子に、取り外し可能な足をのせる台を作っていただきました。これらを組み合わせてベビーチェアの零歳児から、座高の低い低月齢児、大きくなった二歳児までが、それぞれに合った椅子に座って一つの食卓に集えるようになりました。

これらの工夫をしたことで、一、二歳児は自分で椅子

▲一つの食卓に集っての食卓

に上手に座ることができたり、上半身のふらつきが減ったりし、食卓を囲む雰囲気がスムーズで、にぎやかながら落ち着いた面も増えてきました。作っていただいた足の台は、みんなが使いたいと取り合いになるのでは……、または使わないと言い出すのでは……と少し心配したのですが、子どもたちは、それが誰になぜ必要なのかすぐに理解してくれたようでした。

毎年夏を過ぎると、子どもたちがぐんと成長したように感じられますが、実際、一歳児も背が伸びて、台は必要なくなりました。「もう、これいらなくなったね」と保育士同士話しながら、子どもの成長の早さに驚き、また、それがとてもうれしく感じられました。次は、誰がベビーチェアを卒業し、この台を使って食卓につくのか、楽しみです。

三．大学の一施設として

ナーサリーは大学の一施設となり、大学のホームページや学内誌で紹介していただく機会が増えました。また、マスコミの取材も多くあり、大学附属の保育所として知名度も高くなったのでしょうか。学内で開かれるシンポジウムや学会の主催団体から、保育をしてほしい、保育できる場所を貸してほしいなどの依頼がくるようになりました。「学ぶ意欲のあるすべての女性に門を開き、すべての女性に学ぶことの喜びと、知的に生きることのすばらしさを体験してほしい」という、お茶の水女子大学の願いを受けて、ナーサリーもその一翼を担いたいと考えました。

そこで、大学の施設を学外の団体に貸し出すことについて、大学の資産管理をする部署に問い合わせました。同時に、在園児の保育との兼ね合い、保育士の勤務に関すること、安全管理や責任の所在などついても検討しました。その上で、ナーサリーがもっている、乳幼児の保育に適した建物や玩具などの有形の資源、一時預かり保育の仕方や保育の際の人員配置のノウハウなどの無形の資源を駆使してできることは、どのようなことか考えていきました。

まず、在園児の生活を保障することが第一なので、通常の保育を行っている日は受けることができないと判断しました。また、保育士の労働条件の確保や責任の所在の面から、ナーサリーの保育士は保育を行わないことにしました。その上で、できることは大きく三つにまとめられました。

一つ目は、施設の管理です。ナーサリーの職員が施設管理責任者として出勤することにしました。施設の使い方や備品の出し入れに関することなどを保育のスタッフと共に行うことにしました。

二つ目は、月齢や年齢による預かり方のコーディネート、保育スタッフの配置の仕方について主催者にアドバイスすることです。たとえば、二歳児までは午睡が必要ですが、初めて場所や人に囲まれて午睡をすることは困難です。午睡はおうちの方とできるように、二歳児までは午前中のみの保育としたほうが良いということ、併せて小さい子どものいる参加者が参加しやすいよう主催者側にも配慮していただくように伝えました。また、保育スタッフに関しては、多くの学会では学生さんがボランティアでしているとのことでしたので、学生さんであることに配慮して、子どもの数に対して手厚い配置をすること、半日ずつのローテーションを組むほうがよいことなどを提案しました。また、社会福祉協議会のボランティア保険への加入が望ましいのではないかとも話しました。

三つ目は、大学の児童学科・発達臨床学講座の同窓会の協力を得て、ボランティアの保育スタッフの紹介をすることです。保育スタッフを手配する手段をもたない主催者の方の役に立てると考えました。卒業生には保育の経験者も多く、信頼できるスタッフを紹介できました。

今後も、大学の中で活かされる施設を目指していきたいと考えています。先日、見学にいらした先生方が、「今、もっているものを使って、なんでもできるわよ」とおっしゃっていたことが、本当にそのとおりだと、恵まれた環境に感謝する気持ちになりました。

（お茶の水女子大学附属いずみナーサリー）